

令和元年6月18日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02816

研究課題名(和文) 日本語学習者の読解過程と読解困難点に関する実証的研究

研究課題名(英文) A Study of the Reading Processes and Difficulties Encountered in Japanese Texts by Second Language Readers

研究代表者

フォード丹羽 順子 (FORD-NIWA, Junko)

佐賀大学・国際交流推進センター・准教授

研究者番号：70286201

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：日本語学習者の読解過程と困難点を明らかにするために、中級学習者と上級学習者に、主語が省略された文を含む文章を読んで理解した内容と主語を特定した理由を説明してもらうという調査を実施した。その結果、主語の特定に際し、上級学習者は助詞に関する正しい知識を活用するが、中級学習者は「が」や「は」の前の名詞は常に主語だと考えるという間違った知識を活用するという違いが明らかになった。この結果を踏まえ、中級学習者の読解授業で、助詞に関する正しい知識を活用して主語の省略に気づくこと、そして前の文に戻って主語を探して特定することを指導した結果、徐々に、主語の省略に気づいて主語を正しく特定できるようになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語学習者が増加している中で多様なニーズに応える日本語教育が求められており、読むコミュニケーションの教育も重要なものの1つである。学習者の読解過程と困難点に関する研究は増えてきているが、学習者が日本語の文章をどのように読んでいるのかについては、まだわからないことが多い。

現場からは、中上級学習者が日本語の文章を読む際に、省略された文の要素を特定できずに読み誤るという声がしばしば聞かれる。本研究は、学習者が、日本語の文章の特徴の1つである、省略された主語をどのように特定しているかを、中級学習者と上級学習者の読み方を比較して、明らかにした点において意義がある。

研究成果の概要(英文)：This study investigates the identification of the subject in Japanese texts by intermediate and advanced second language readers in order to determine the reading processes and difficulties and to provide a proper strategy to address them.

Our initial findings indicated that advanced readers utilize correct knowledge about particles in identifying the subject, whereas intermediate readers have difficulty identifying the subject due to faulty knowledge of particles.

Based on these findings the author devised a teaching method to improve the knowledge of particles and the recognition of the ellipsis of the subject among intermediate second language readers. As a result, gradual improvement in reading comprehension by the target group has been noted.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語学習者 読解過程 読解困難点 省略 主語の特定

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本語学習者の読解過程に関する研究は増えてきているが(館岡洋子 2001、2005)、学習者が日本語の文章をどのように読んでいるのかについては、まだわからないことが多い。読解過程は外からは見えないものなので、学習者ひとりひとりに聞いてみるしかない。本研究は、日本語学習者に日本語の文章を読んでもらって、その読解過程と読解困難点を明らかにしようとするものである。

現在ある読解教材の多くでは、文章の内容に関し、文章を読ませたあとで内容理解を確認するための設問が用意されている。一方、文法面に関して問われることは多くなく、問われる場合は指示語の指示対象についての問いが中心である。

筆者は、日本語中級学習者に対する読解授業の中で、学習者とのやりとりから、学習者が日本語の文章を読む中で、指示語の指示対象がわからないこと以外にも、次のようなことが、文章を読み誤る原因になっていることに気づいた。

文の要素が省略されていることに気づかず、また省略された要素について質問をすると、正しく特定することができない。省略に気づいている場合でも、書かれていないからわからない。

そこで、学習者が日本語の文章を読めるようになるためには、省略された要素を正しく特定することが重要だと考え、特に、省略要素の読みに焦点をあてて、学習者の読解過程と読解困難点を明らかにしたいと考えた。そして、その研究成果を読解教育に生かしたいと思う。

参考文献

館岡洋子(2001)「読解過程における自問自答と問題解決方略」『日本語教育』111号、pp. 66-75

館岡洋子(2005)『ひとりで読むことからピア・リーディングへ - 日本語学習者の読解過程と対話的協働学習 - 』東海大学出版会

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語学習者の読解過程と読解困難点を明らかにすることである。特に、文法面でどの部分につまずいて読み誤っているのか、どの部分に注意を向けて読んでいるのか、反対に、どの部分を読み飛ばしているのか、という学習者の読み方や、間違った読解ストラテジー、読解困難点を明らかにすることである。

授業内での学習者とのやりとりから、学習者が省略された文の要素を特定する際に困難を抱えていることが見えてきたため、省略された文の要素(特に主語)をどのように特定しているのかということに焦点をしばって研究を行う。そして、その研究成果を実際読解教育にいかすことを目指す。

3. 研究の方法

まず、予備調査として、日本語中級学習者に生の文章を読んでもらい、その結果をもとにして、本調査のための調査文章(主語が省略された文を含む文章)を作成する。

いずれの調査でも、調査協力者に普段どおりに自由に辞書やインターネットを使って読んでもらい、理解したことを英語あるいは中国語(通訳を介して)、どちらも不可能で日本語能力が調査の遂行にあたって十分な場合は日本語で、話してもらおう。

本調査では、学習者の日本語能力レベルによって読解過程と読解困難点にどのような違いがあるかを比較するために、中級学習者と上級学習者に対して調査を実施する。

調査協力者には、主語が省略された文を含む調査文章を読んで、理解した内容と主語を特定

した理由を説明してもらおう。調査対象になっている述語の主語に焦点を当て、主語が話されなかった場合には、調査者から主語が何(だれ)であるかを尋ねる質問をする。また、そのように主語を特定した理由を話してもらおう。

4. 研究成果

日本語中級学習者と上級学習者に、主語が省略された文を含む調査文章を読んで、理解した内容と主語を特定した理由を説明してもらおうという調査を実施した結果、次のようなことが明らかになった。

学習者は主語の特定に際して、助詞に関する知識を活用して主語を特定するが、特定できなかったり、その特定を強化したりするために、意味の整合性を考えて特定するということがわかった。

助詞に関する知識を活用して特定する際には、中級学習者は「から」や対象(原因)を表す「に」については正しい知識を活用するが、「が」や「は」については、これらの前の要素(名詞)を常に主語だと考えるという間違った知識を活用していた。一方、上級学習者はおおむね正しい知識を活用することが明らかになった。

たとえば、次の(1)では、調査対象になっている述語「喜んでいる」の主語は前の文にある下線を引いた「カロリーを気にしている人やその家族」であるが、中級学習者の9割は「喜んでいる」の文頭にある「開発者」(波線部)が主語だと間違って特定する。その理由として、半数の学習者は「開発者」が「が」の前にあるから主語である、というように、従属節の主語を表す「～が」を主文の主語だと考えるという、助詞に関する間違った知識を活用していた。他の学習者は助詞「が」には注意を向けず、意味の整合性だけを考えて「開発者」が主語であると答えた。

一方、上級学習者は全員が主語を正しく特定していた。「開発者」が主語ではない理由を尋ねると、「開発者が苦労した」と書かれており、「が」だから「苦労した」までで止まる、というように、助詞に関する正しい知識を活用していた。

(1) 食品のカロリーがわかる装置、「カロリースティック」が発売された。カロリースティックはUSBメモリーのように小さくて軽い。そのため、カロリーを気にしている人やその家族は買い物に持って行き、買いたい食品のカロリーを調べられるようになった。開発者がもっとも苦労したという、スティックを食品に向けるだけでその食品のカロリーが表示される点が簡単ですばらしいと喜んでいる。

次の(2)では、調査対象になっている述語「いい」の主語は前の文にある下線を引いた「グリーン・ワーク」であるが、中級学習者は全員が「は」の前にある要素が主語だと間違って特定していた。その理由として、「は」の前にあるから主語だというのが半数、その他は「は」には注意を向けず、意味の整合性だけを考えて特定したということを挙げていた。

一方、上級学習者の7割近くは主語を正しく特定していたが、「は」の前にあるから主語であると答えた学習者も2割いた。正答している学習者に対し、「は」の前の要素が主語ではない理由を尋ねると、「～には」と書かれていて、この「に」は「～にとって」という意味である。主語は省略されていて、それは前の文にある「グリーン・ワーク」だというように、助詞に関する正しい知識を活用していた。

(2) 今、林業の就業人口は最盛期の3分の1の5万人ほどだが、若い人に注目すると、就業者は増えている。毎年3000人が新たに林業を始めているが、その背景には「グリーン・ワーク」という国の助成制度がこうした人たちを支援していることがある。現場で働きながら林業について学ぶことができ、林業をやったことのない人が林業に挑戦するにはとてもいいのである。

この結果を踏まえて、中級学習者の読解授業において次のことを実践した。助詞に関する正しい知識を活用して主語の省略に気づくこと(従属節内の「～が」が文末の述語まで係っていくかどうか分かることや、たとえば「～には」では「に」の意味に注意を向けて「は」の前の要素は主語ではないとわかること)そして前の文に戻って主語を探して特定することを指導した結果、主語が省略されていることに気づくことができるようになった。そして、徐々に、主語を正しく特定することができるようになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

(1) フォード丹羽順子(2017)

「日本語学習者の読解における主語の特定 - 中級学習者と上級学習者の比較 - 」

『佐賀大学全学教育機構紀要』第6号、101-116、佐賀大学、査読なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。